

<総括>

試験時間	120分	総解答字数	2000字
------	------	-------	-------

2026年度は、「社会の先導者としての知識人」について、様々な視点から、論じる資料文の議論を踏まえて、今の時代に顕在化している社会課題の中から重要だと思える課題についてどのように総合政策的にアプローチしていくのかを問う問題になっている。出題者が知識人論を真正面から取り上げている背景には現在の日本や世界への批判、とりわけ反知性主義への批判があるのだろう。そして総合政策学部の受験生にはそのような状況から距離を置き、社会課題について考察し、社会を先導できる力を求めているのだと考えられる。

重要な社会課題であれば何でも取り上げることができるので、きちんと小論文の準備をしていた受験生にとっては論じやすい問題であっただろう。ただし、資料文では論じるべき課題についての手がかりとなる情報が具体的には与えられていない上に問2と問3で1000字程度論述をしなければならないため、小論文の対策をしておらず、社会課題についての理解が十分でない受験生は苦勞したことだろう。知識人論というテーマになじみのない受験生も少なからずいるだろうが、過去において、読書と知識の問題が出題されているので、きちんと過去問に取り組んでいた受験生にとってはそこまで苦にはならなかったはずである。なお、資料5の『文明之概略』は、少子化と格差を取り上げた2007年の問題でも「議論の本位と箇条」についての説明が資料に含まれていた。

総合政策学部における学びについて論じる上では、総合政策学部でどのようなことを学べるのかに関する理解がないと漠然とした論述になってしまう。総合政策学部の特性をきちんと理解しておくことを求めるのもこれまで通りの出題傾向である。

総合政策学部では、例年学部特性の強い出題が行われている。また最近では、資料を適切に処理するだけでなく、自分なりの独自の発想を問うようになっている。小手先の論文作成テクニックでやり過ごせるようなレベルの設定ではなく、適切に自分が設定した主題を論じることができるかどうかを正面から問うている点で骨太の良問が出題されている。

<課題文の分析>

大問番号	
内容 (主題)	「社会の先導者としての知識人」が取り組むべき社会課題
出典 (作者)	資料1 ノーム・チョムスキー、清水知子・浅見克彦・野々村文宏訳『知識人の責任』青弓社(2006)より出題者が抜粋・編集 資料2 ベネディクト・アンダーソン、白石さや・白石隆訳『想像の共同体』NTT出版(1997)より出題者抜粋・編集 資料3 エドワード・W・サイード、大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社(1998)より出題者が抜粋・編集 資料4 ピエール・ブルデュー、石井洋二郎訳『芸術の規則II』藤原書店(1996)、加藤晴久『ブルデュー 闘う知識人』講談社選書メチエ(2015)より出題者が抜粋・編集 資料5 福澤諭吉著、斎藤孝訳『現代語訳 文明論之概略』ちくま文庫(2013)より出題者が抜粋・編集(原著は1875年刊) 資料6 加藤寛『慶應湘南藤沢キャンパスの挑戦』東洋経済新報社(1992)より出題者が抜粋・編集
長短・ 難易等 前年比較	長短(短い・やや短い・変化なし・ やや長い ・長い) 難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

小論文

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
課題文 学部系統的			問1	要約	800字以内	資料1から資料4に論じられている知識人の役割やあるべき姿、知識人に対する批判について、各資料の違いと特徴がわかるように800文字以内で要約する。
			問2	分析・論述	600字以内	資料5を読み福澤諭吉が当時の社会をいかに捉えて何を人々に訴えたのかを論じる。さらにそれを踏まえて、今の時代に顕在化している社会課題の中で自分が重要だと考えるものを選び、その課題がどのようなものか、またその課題がなぜ重要なのかを述べる。
			問3	論述	600字以内	問3 総合政策学部での学びを通じてどのような「社会の先導者」を目指し、問2で取り上げた課題にどのように向き合っていくのか。資料6に示された総合政策学部の理念を踏まえて、また資料1から資料4に示されたかつての知識人像や、資料5に示された福沢諭吉の考え方も必要に応じて言及しながら600文字以内で書く。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

問1

要約するうえでは、設問の要求を意識し、各資料の差異や特徴がはっきりするようにまとめる。課題文のこまごまとした内容をまとめることは要求されていないので、細部にとらわれすぎることなく、大掴みにまとめることが重要である。

問2

福澤諭吉の主張を論じるだけでなく、重要な社会課題を取り上げて論じる。問3での論述のしやすさも意識しながら、つまり総合政策学部での学びについて論じることを意識しながら、重要な社会課題を取り上げなければならない。社会問題に関する問題意識の鋭さや深さが問われている。私的な問題や些末な問題は避ける。設問の要求が多いので社会課題の説明と、その重要性についての説明はコンパクトにまとめる。

問3

各資料の議論を全て踏まえようとすると難しいので、資料の中から自分にとって重要だと思われる論点を参照して自分なりの議論のスタンスを作ると良い。また、総合政策学部における学びについて論じる上では、総合政策学部のカリキュラムや学部の特性（文理融合、学問分野横断的、研究会中心の学び、等々）を踏まえた論述を行う必要がある。

○学習対策

総合政策学部では例年学部特性のきわめて強い出題が行われている。一貫して問われているのは問題発見・問題解決能力やそれと結びついた政策科学の基本的な理解と資料を批判的・創造的に利活用する力、データ分析力、イノベーションを生み出す柔軟な発想力などである。ようするに大学入学後に、主体的に研究を進めていくことのできる基礎力が備わっているのかを単刀直入に問うのである。

難易度は高いので、高校までの学習だけでは十分ではない。特に現役生は時間がないため小論文対策を後回しにしてしまいがちであるが、それでは対策が間に合わなくなるおそれがあるので、早くから計画的に取り組んでほしい。

社会科学や政策科学の基礎を学んでおくとともに、新聞などにきちんと目を通し時事問題についてたんに漠然と知っているだけでなく、科学的に分析できる力をしっかりと養いたい。また総合政策学部ではどういった研究が行われているのか、またどういうカリキュラムの下で自分は研究を進めていくのか理解を深めたい。そしてその上で過去問を解き、実践的な力を身に付ける必要がある。過去問を解いていく上では、どのように長い資料を適切に処理して、解答を作っていけばよいか練習を積むとよい。

大学院レベルの学びを行えるとする総合政策学部では1年次から主体的に研究を進めていくことが求められている。それゆえ、小手先の文章作成スキルではなく、大学での研究を行っていくことのできる土台を受験生がきちんと作っているかどうか正面から問われるのである。こうした土台を河合塾の小論文の授業を通じて地道に養っていくことが不可欠である。河合塾の小論文ではレギュラー授業から夏期講習や冬期及び直前講習まで、段階的かつ体系的に対策を積むことのできるカリキュラムが整っているため、ぜひ有効に活用してほしい。